

はしがき

本書は、織豊期に生きた主要人物の居所と行動を確定することを、目的に編まれたものである。

人物の居所を明らかにすることは、個々の研究者が、その時々分析にあたって日常的に行ってきたことである。しかし、こうした作業は、個々別々に、また特定の人物、特定の時期に限ってなされるに過ぎず、その成果も研究者全体が共有しうる性格のものではない。こうした作業それ自体を研究目標とすることで、また複数の研究者によって複数の人物をとりあげることで、さらにそこで得られた知見を相互に共有することで、居所確定の情報は大きくふくらみ、結果としてよりの確な、そしてより効率的な居所確定を可能とするはずである。

当初、織豊期の主要人物として、政権の中心人物(足利義昭・織田信長・豊臣秀吉)、政権中枢にいる人物(明智光秀・前田玄以・浅野長政・石田三成等)、政権に大きな影響力を持った人物(柴田勝家・徳川家康・前田利家・毛利輝元等)、有力大名(上杉景勝・伊達政宗等)、有力武将(加藤清正・福島正則・黒田孝高等)、政権周辺の僧侶・文化人(千利休・西笑承兌等)、政権に関係深い公家衆(近衛前久・吉田兼見等)、政権に関わる女性たち(北政所・淀殿・孝蔵主等)をあげ、その居所と行動を確定する作業にかかった。

作業が進行するなか、それぞれの人物によってその居所を確定するに十分な情報・史料の得られないものもあり、その居所と行動を記述する場合、基本的な事柄については、統一を図ったが、それぞれの人物についてはその特性に随って叙述することとした。

当初予定していた人物でとりあげえなかつたものもあるが、付け加えた人物もある。具体的には、25名をとりあげた。織田信長・豊臣秀吉・豊臣秀次・徳川家康・足利義昭・柴田勝家・丹羽長秀・明智光秀・細川藤孝・前田利家・毛利輝元・上杉景勝・伊達政宗・石田三成・浅野長政・福島正則・片桐且元・近衛前久・近衛信尹・西笑承兌・大政所・北政所・浅井茶々・孝蔵主である。

本書に収録したこれらの人物は、この時期の主要人物ではあるが、いうまでもなくこの時期の主要人物のすべてを網羅してはならず、現段階で一応のまとまりのついたものを収録したにすぎない。今後、とりあぐべくしてとりあげられなかつた人物についても検討を進め、さらにとりあげた人物についての内容も含め、一層の充実を図りたい。なお、本書の誤りや新たな居所情報を見いだされた場合には、ぜひ一報いただければ幸いである。

なお、本書は、平成18年度から21年度にかけて「織豊期主要人物の居所と行動に関する基礎的研究」を研究課題に、科学研究費の交付を受けた研究の成果の一部であり、藤井讓治を研究代表者とし、杉田善雄・中野等・早島大祐・福田千鶴・堀新・松澤克行・横田冬彦・相田文三・穴井綾香・尾下成敏・藤田恒春の各氏に参加いただいた。

最後になりましたが、本書の刊行を引き受けて下さった思文閣出版、なかでもお世話いただいた田中峰人さんに謝意を表します。

2011年5月 藤井讓治

〈第2版出版にあたって〉

お陰さまで、多くの方々に利用いただき、この度、版を重ねることになりました。第2版出版にあたっては、初版発行後の研究成果により日付が確定するなどしたところは、訂正あるいは追加しましたが、全体としては大幅な改訂は行わず、誤植等の訂正に止めました。ただ、「豊臣秀吉の居所と行動（天正10年6月2日以前）」については、従来の関係文書の編年に誤りが見つかったため、かなり大きな訂正を施しました。

なお、第2版での訂正箇所の主要な点については、は思文閣出版HPで掲載することになっています。

2015年12月 藤井讓治

目次

はしがき

凡例／典拠・参考文献／典拠の略称

織田信長の居所と行動	堀 新	3
豊臣秀吉の居所と行動(天正10年6月2日以前)	堀 新	38
豊臣秀吉の居所と行動(天正10年6月以降)	藤井讓治	52
豊臣秀次の居所と行動	藤田恒春	85
徳川家康の居所と行動(天正10年6月以降)	相田文三	98
足利義昭の居所と行動	早島大祐	141
柴田勝家の居所と行動	尾下成敏	146
丹羽長秀の居所と行動	尾下成敏	158
明智光秀の居所と行動	早島大祐	173
細川藤孝の居所と行動	早島大祐	187
前田利家の居所と行動	尾下成敏	204
毛利輝元の居所と行動(慶長5年9月14日以前)	中野 等	224
毛利輝元の居所と行動(慶長5年9月15日以降)	穴井綾香	238
小早川隆景の居所と行動	中野 等	243
上杉景勝の居所と行動	尾下成敏	257
伊達政宗の居所と行動	福田千鶴	281
石田三成の居所と行動	中野 等	297
浅野長政の居所と行動	相田文三	312
福島正則の居所と行動	穴井綾香	336
片桐且元の居所と行動	藤田恒春	347
近衛前久の居所と行動	松澤克行	365
近衛信尹の居所と行動	松澤克行	384
西笑承兌の居所と行動	杉田善雄	409
大政所の居所と行動	藤田恒春	421
北政所(高台院)の居所と行動	藤田恒春	427
浅井茶々の居所と行動	福田千鶴	448
孝蔵主の居所と行動	藤田恒春	453

執筆者紹介

凡 例

- 一 本書は、織豊期の主要人物の居所と行動を個人別、編年に明らかにしようとしたものであり、対象とした人物の年譜ではない。
- 一 本書の各論は、対象とする人物の【略歴】、次いで【居所と行動】を年次を追って記載することを原則とした。また居所や行動が細かに判明するものについては、その【概略】をあげその後に【詳細】情報を記した。
- 一 【居所と行動】については、その根拠となる典拠を記すことを原則とした。
- 一 書誌情報が重出するのを避けるために、複数の論考にわたる典拠・参考文献等を凡例の後にあげた。なお、個別の論考についての主な典拠や参考文献は、それぞれの論考の末尾に掲げた。
- 一 典拠のうち頻繁に利用したものについては、略称を用いた。その一覧は典拠・参考文献の後に掲げた。
- 一 典拠としてあげた日記の記事が同日の場合には「同日条」等の記載を省略した。
- 一 引用史料等では、通用の字体を用いることを原則とした。

典拠・参考文献

【日記等】

- 『家忠日記』(増補続史料大成 臨川書店 1981年)
- 「宇野主水日記」(『石山本願寺日記』下巻 清文堂出版 1984年 初版1930年／『寺内町研究』創刊号～6号 1995年～2001年)
- 『梅津政景日記』(大日本古記録 岩波書店 1953年～66年)
- 「大和田重清日記」(『日本史研究』44～46・48・49・52 1959年～61年)
- 『お湯殿の上の日記』(続群書類従補遺 続群書類従完成会 1932年～34年)
- 『兼見卿記』(史料纂集 続群書類従完成会 1971・76年／『ビブリア』118～124・126・128・129 2002年～09年)
- 『義演准后日記』(史料纂集 続群書類従完成会 1976年～刊行中)
- 『北野世家日記』(史料纂集 続群書類従完成会 1972年～刊行中)
- 『北野天満宮史料 古記録』(北野天満宮史料刊行会 1980年)
- 『北野天満宮史料 目代日記』(北野天満宮史料刊行会 1975年)
- 『慶長日伴録』(史料纂集 続群書類従完成会 1981年・96年)
- 「玄与日記」(『群書類従』18 続群書類従完成会 1932年)
- 『駒井日記』(文献出版 1992年)

- 『三藐院記』(史料纂集 続群書類従完成会 1975年)
- 『慈性日記』(史料纂集 続群書類従完成会 2000年・01年)
- 『舜旧記』(史料纂集 続群書類従完成会 1970年～99年)
- 「尋憲記」(原本は国立公文書館内閣文庫蔵)
- 「宗及茶湯日記 自会記」(『茶道古典全集』8 淡交新社 1959年)
- 「宗及茶湯日記 他会記」(『茶道古典全集』7 淡交新社 1959年)
- 「宗湛日記」(『茶道古典全集』6 淡交新社 1958年)
- 「孝亮宿禰記」(原本は宮内庁書陵部蔵)
- 『多聞院日記』(増補続史料大成 臨川書店 1978年)
- 「親綱卿記」(文禄4年冬『続々群書類従』5 続群書類従完成会 1969年 影写本あり)
- 「天正記」(別名は「輝元公上洛日記」 『長周叢書』第20巻 マツノ書店 1991年他)
- 『言緒卿記』(大日本古記録 岩波書店 1995年・98年)
- 『言継卿記』(続群書類従完成会 1966年・67年)
- 『言経卿記』(大日本古記録 岩波書店 1959年～91年)
- 『時慶記』(臨川書店 2001年～刊行中)
- 「二条宴乗日記」(『ビブリア』52～54・60・62 1972年～76年)
- 『晴豊記』(増補続史料大成 臨川書店 1967年)
- 「日々記」(原本は国立公文書館内閣文庫蔵)
- 『本光国師日記』(続群書類従完成会 1966年～71年)
- 「光豊記」(原本は京都大学総合博物館蔵)
- 『鹿苑日録』(太洋社 1934年～37年)

【古文書】

- 『浅野家文書』(大日本古文書 東京大学史料編纂所 1905年)
- 『石清水文書』(大日本古文書 東京大学史料編纂所 1908年～15年)
- 『石見吉川家文書』(大日本古文書 東京大学史料編纂所 1931年、『吉川家文書別集』と合冊)
- 『上杉家文書』(大日本古文書 東京大学史料編纂所 1931年～63年)
- 『賀茂別雷神社文書』(史料纂集 続群書類従完成会 1988年)
- 『北野天満宮史料 古文書』(北野天満宮史料刊行会 1978年)
- 『吉川家文書』(大日本古文書 東京大学史料編纂所 1925年・26年)
- 『朽木家文書』(史料纂集 八木書店 2007年～2008年)
- 『黒田家文書』第1巻(福岡市博物館 2000年)
- 『小早川家文書』(大日本古文書 東京大学史料編纂所 1927年)
- 『高野山文書』(大日本古文書 東京大学史料編纂所 1904年～1907年)

- 『金剛寺文書』(大日本古文書 東京大学史料編纂所 1920年)
『西笑和尚文案』(思文閣出版 2007年)
『相良家文書』(大日本古文書 東京大学史料編纂所 1917年・18年)
『真田家文書』(長野市 1981年～83年)
『島津家文書』(大日本古文書 東京大学史料編纂所 1942年～66年)
『大徳寺文書』(大日本古文書 東京大学史料編纂所 1943年～85年)
『伊達家文書』(大日本古文書 東京大学史料編纂所 1908年～14年)
『蜷川家文書』(大日本古文書 東京大学史料編纂所 1981年～96年)
『萩藩閥閥録』(山口県文書館 1967年～89年)
『益田家文書』(大日本古文書 東京大学史料編纂所 2000年～刊行中)
『毛利家文書』(大日本古文書 東京大学史料編纂所 1920年～24年)
『歴代古案』(史料纂集 続群書類従完成会 1993年～2002年)

【編纂物】

- 「安土日記」(写本あり)
『十六・七世紀イエズス会日本報告集』(同朋舎出版 1987年～98年)
「家忠日記追加」(写本あり)
『寛永諸家系図伝』(続群書類従完成会 1980年～97年)
『寛政重修諸家譜』(続群書類従完成会 1964年～92年)
『鹿児島県史料 旧記雑録後編』1～4(鹿児島県維新史料編さん所 1981年～84年)
『公卿補任』3(新訂増補国史大系 吉川弘文館 1974年)
『慶長年録』(内閣文庫所蔵史籍叢刊 汲古書院 1986年)
『慶長見聞録案紙』(内閣文庫所蔵史籍叢刊 汲古書院 1986年)
『元和年録』(内閣文庫所蔵史籍叢刊 汲古書院 1986年)
『史料綜覧』10～17(東京大学史料編纂所 1938年～63年)
『信長公記』(角川書店 1969年)
「池田家文庫本信長記」(福武書店 1975年)
『駿府記』(史籍雑纂 続群書類従完成会 1994年)
『太閤記』(新日本古典文学大系 岩波書店 1996年)
『大日本史料』第10編・第11編・第12編(東京大学史料編纂所 1900年～刊行中)
『伊達治家記録』1～4(仙台藩史料大成 宝文堂 1972年～74年)
『朝野旧聞哀藁』7～10(内閣文庫所蔵史籍叢刊特刊1 汲古書院 1983年)
『当代記』(史籍雑纂 続群書類従完成会 1994年)
『東武実録』1(内閣文庫所蔵史籍叢刊 汲古書院 1981年)
『徳川実紀』1・2(新訂増補国史大系 吉川弘文館 1964年)

- 『譜牒余録』中(国立公文書館内閣文庫 1974年)
『武徳編年集成』上(名著出版 1976年)
『日本史』(ルイス・フロイス著 松田毅一・川崎桃太訳 中央公論社 1977年～80年)
『豊大閣真蹟集』(東京大学史料編纂所 1938年)
『綿考輯録』1・2(出水神社 1988年)
『蓮成院記録』(増補統史料大成 臨川書店 1978年、『多聞院日記』と合冊)

【研究書】

- 奥野高広編『増訂織田信長文書の研究』(吉川弘文館 1988年、初版1969年・70年)
高木昭作監修・谷口克広著『織田信長家臣人名辞典』(吉川弘文館 1994年)
中村孝也編『徳川家康文書の研究』(日本学術振興会 1958年～71年)
中村孝也編『新訂版徳川家康文書の研究』(日本学術振興会 1980年～82年)
徳川義宣編『新修徳川家康文書の研究』(徳川黎明会 1983年・2006年)
三鬼清一郎編『稿本豊臣秀吉文書(1)』(神奈川大学生協同組合印刷部 2005年)

【自治体史】

- 『愛知県史』資料編11織豊1・2(愛知県 2003・2007年)
『青森県史』資料編中世1・近世1(青森県 2004・2001年)
『秋田県史』資料古代・中世編(秋田県 1961年)
『岩手県史』3(岩手県 1961年)
『神奈川県史』資料編3古代・中世3下(神奈川県 1979年)
『岐阜県史』史料編古代・中世1・4・補遺(岐阜県 1961・1973・1999年)
『新編埼玉県史』資料編6中世(埼玉県 1980年)
『佐賀県近世史料』1編1巻(佐賀県立図書館 1993年)
『佐賀県史料集成』古文書編4・7(佐賀県立図書館 1959・1963年)
『静岡県史』資料編8中世4(静岡県 1996年)
『信濃史料』17・18巻(信濃史料刊行会 1961・1962年)
『上越市史』別編1・2上杉氏文書集一・二(上越市 2003・2004年)
『仙台市史』資料編10～13伊達政宗文書1～4(仙台市 1994～2007年)
『栃木県史』史料編中世3(栃木県 1978年)
『富山県史』史料編Ⅱ・Ⅲ中世・近世上(富山県 1975・1980年)
『新潟県史』資料編3中世1(新潟県 1982年)
『兵庫県史』史料編中世2・9(兵庫県 1987・1997年)
『広島県史』古代中世資料編Ⅱ～Ⅴ(広島県 1976～1980年)
『広島県史』近世資料編Ⅱ(広島県 1976年)

- 『福井県史』資料編中・近世1・4(福井県 1987・1987年)
『福岡県史』近世史料編柳川藩初期(上)・福岡藩町方(一)(西日本文化協会 1986・1987年)
『福島県史』7資料編2古代・中世資料(福島県 1966年)
『三重県史』資料編近世1(三重県 1993年)
『宮崎県史』史料編中世1(宮崎県 1990年)
『山形県史』1・2(山形県内務部 1920年)
『山口県史』史料編中世2・3・近世1下(山口県 2001・2004・1999年)
『山梨県史』資料編 近世1(山梨県 1998年)

【古書目録】

- 『思文閣古書資料目録』(思文閣出版古書部)
『思文閣墨蹟資料目録』(思文閣)

典拠の略称

【日記等】

- | | |
|-------------------------------|--|
| 『大日本史料』第十二編之五
→『大日本史料』12-5 | 『舜旧記』→『舜旧』
「尋憲記」→「尋憲」
「宗及茶湯日記 自会記」→「宗及自会記」
「宗及茶湯日記 他会記」→「宗及他会記」
「宗湛日記」→「宗湛」
「孝亮宿禰記」→「孝亮」
『多聞院日記』→『多聞院』
「親綱卿記」→「親綱」
「天正記」(「輝元公上洛日記」)
→「輝元上洛日記」 |
| 『家忠日記』→『家忠』 | 『言緒卿記』→『言緒』 |
| 「宇野主水日記」→「宇野」 | 『言繼卿記』→『言繼』 |
| 『梅津政景日記』→『梅津』 | 『言經卿記』→『言經』 |
| 「大和田重清日記」→「大和田」 | 『時慶記』→『時慶』 |
| 『お湯殿の上の日記』→『お湯殿』 | 「二条宴乗日記」→「二条」 |
| 『兼見卿記』→『兼見』 | 『晴豊記』→『晴豊』 |
| 『兼見卿記』別本→「別本兼見」 | 『本光国師日記』→『本光』 |
| 『義演准后日記』→『義演』 | 「光豊記」→「光豊」 |
| 『北野社家日記』→『北野社家』 | 『鹿苑日録』→『鹿苑』 |
| 『北野天満宮史料 古記録』→『北野古記録』 | |
| 『北野天満宮史料 目代日記』→『北野目代』 | |
| 『慶長日件録』→『慶長』 | |
| 「玄与日記」→「玄与」 | |
| 『駒井日記』→『駒井』 | |
| 『三藐院記』→『三藐』 | |
| 『慈性日記』→『慈性』 | |

【古文書】

『浅野家文書』→『浅野』
『石清水文書』→『石清水』
『石見吉川家文書』→『石見吉川』
『上杉家文書』→『上杉』
『賀茂別雷神社文書』→『賀茂』
『北野天満宮史料 古文書』→『北野古文書』
『吉川家文書』→『吉川』
『朽木家文書』→『朽木家』
『黒田家文書』→『黒田』
『小早川家文書』→『小早川』
『高野山文書』→『高野山』
『金剛寺文書』→『金剛寺』
『西笑和尚文案』→『西笑』
『相良家文書』→『相良』
『真田家文書』→『真田』
『島津家文書』→『島津』
『大徳寺文書』→『大徳寺』
『伊達家文書』→『伊達』
『蜷川家文書』→『蜷川』
『萩藩閥閥録』→『閥閥録』
『益田家文書』→『益田』
『毛利家文書』→『毛利』
『歴代古案』→『歴代』

【編纂物】

『安土日記』→『安土』
『十六・七世紀イエズス会日本報告集』
→『イエズス会』
『家忠日記追加』→『家忠追加』
『寛永諸家系図伝』→『寛永伝』
『寛政重修諸家譜』→『寛政譜』
『鹿児島県史料 旧記録後編』
→『薩藩旧記』
『公卿補任』→『公卿』

『慶長見聞録案紙』→『見聞録案紙』
『信長公記』→『公記』
『池田家文庫本信長記』→『池田本信長記』
『駿府記』→『駿府』
『太閤記』→『太閤』
『伊達治家記録』→『治家記録』
『朝野旧聞哀藁』→『朝野』
『当代記』→『当代』
『東武実録』→『東武』
『徳川実紀』→『実紀』
『譜牒余録』→『譜牒』
『武徳編年集成』→『武徳』
『豊大閤真蹟集』→『豊大閤』
『綿考輯録』→『綿考』
『蓮成院記録』→『蓮成院』

【研究書】

『増訂織田信長文書の研究』→『増訂信長』
『織田信長家臣人名辞典』→『信長人名』
『徳川家康文書の研究』→『家康』
『新修徳川家康文書の研究』→『新修家康』
『新訂版徳川家康文書の研究』→『新訂家康』
『稿本豊臣秀吉文書(1)』→『秀吉』

【自治体史】

『愛知県史』資料編11織豊1 →『愛知織豊1』
『青森県史』資料編中世1 →『青森中世1』
『秋田県史』資料古代・中世編
→『秋田古代中世』
『岩手県史』3 →『岩手』
『神奈川県史』資料編3 古代・中世3 下
→『神奈川』
『岐阜県史』史料編古代・中世1
→『岐阜古代中世1』
『新編埼玉県史』資料編6 中世 →『埼玉6』

『佐賀県近世史料』第1編第1巻
→『佐賀近世1』
『佐賀県史料集成』古文書編4
→『佐賀古文書4』
『静岡県史』資料編8中世4→『静岡』
『信濃史料』17巻→『信濃17』
『上越市史』別編1上杉氏文書集一
→『上越別1』
『仙台市史』資料編10伊達政宗文書1
→『政宗1』
『栃木県史』史料編中世3→『栃木中世3』
『富山県史』史料編Ⅱ中世→『富山・中世』
『新潟県史』資料編3中世1→『新潟中世1』
『兵庫県史』史料編中世2→『兵庫中世2』
『広島県史』古代中世資料編Ⅱ
→『広島古代中世Ⅱ』

『福井県史』資料編3 中・近世1
→『福井中・近世1』
『福岡県史』近世史料編 福岡藩町方(一)
→『福岡町方1』
『福島県史』7資料編2古代・中世資料
→『福島』
『三重県史資料編近世1』→『三重近世1』
『宮崎県史』史料編中世1→『宮崎中世1』
『山形県史』巻1→『山形巻1』
『山口県史』史料編中世2→『山口中世2』
『山梨県史』資料編 近世1』
→『山梨近世1』

【古書目録】

『思文閣古書資料目録』→『思文閣古書』
『思文閣墨蹟資料目録』→『思文閣墨蹟』

織田信長の居所と行動

堀 新

【略歴】

信長は、天文3年(1534)5月、父信秀の居城である尾張国勝幡城で生まれた。天文15年に元服して三郎信長と名乗り、翌天文16年に初陣。天文18年頃に斎藤道三の息女と婚姻した。天文18年11月に熱田八ヶ村中宛に発給した制札が初見文書である。

天文21年3月に父信秀が死去し、家督を継承する。天文22年4月に聖徳寺で斎藤道三と会見する。天文23年4月、清須織田家が滅亡し、清須城へ入城する。同年11月上総守、すぐに上総介と改める。永禄元年(1558)11月、弟信勝を誘殺する。永禄2年2月に上洛する。3月に岩倉城を攻略し、尾張統一を達成する。

永禄3年5月、桶狭間の戦いで今川義元を討ち取る。永禄6年4月、三介と改名する。7月頃に小牧山城へ移転する。永禄9年6月、尾張守と改称する。

永禄10年8月、井口城を攻略し、美濃国を併合する。井口を岐阜と改め、ここを居城とする。

永禄11年7月、足利義昭を美濃へ迎える。8月、弾正忠と改称する。9月7日岐阜を出発し、10月14日上洛する。26日に京都を出発し、28日に岐阜へ帰国する。三好三人衆蜂起の報を受け、永禄12年1月10日上洛する。2月7日から義昭の二条城普請を開始する。8月20日、伊勢国へ侵攻する。10月に上洛し、義昭と衝突して帰国する。

永禄13年(1570)4月若狭・越前を攻め、浅井長政の寝返りを知って退却する。6月姉川の戦いで浅井・朝倉勢を破る。8月三好三人衆を攻め、9月に本願寺が蜂起する。12月、浅井・朝倉氏との講和が成立する。元亀2年(1571)5月、伊勢長島一向一揆に敗れる。6月「平信長」と称する。9月比叡山を焼き討ちする。元亀3年9月、義昭に17ヶ条「条々」を提出する。

元亀4年(1573)3月足利義昭が挙兵し、4月に洛中洛外を放火して講和する。7月義昭が再挙して真木島城に籠城すると、義昭を追放して室町幕府を滅ぼす。改元を申し入れて天正と改元。8月朝倉氏・浅井氏を滅ぼす。12月正親町天皇の譲位を申し入れる。

天正2年3月、東大寺蘭奢待^{らんじやたい}を切り取る。9月伊勢長島の一方向一揆を滅ぼす。天正3年5月、長篠の戦いで武田勝頼を破る。7月「朝廷改革」を実行し、5人の奉行=伝奏を設置する。官位叙任を辞退し、代わりに家臣を叙任させる。9月越前一方向一揆を鎮圧し、「越前国掟」を定める。11月従三位・権大納言・右大将に任官する。嫡男信忠に織田家督を譲る。

天正4年1月、安土城普請を始め、2月に移る。6月末～7月初に4人の伝奏衆を蟄居とし、7月に「禁中之義」は信長の了解が必要とする。11月正三位・内大臣に昇進する。天正5年3月、摂河泉を平定する。閏7月二条屋敷で近衛信基元服の加冠を務める。11月従二位・右大臣に昇進する。天正6年1月正二位に昇進するが、4月に右大臣・右大将を辞官する。10月荒木村重が謀叛し、11月摂津に出陣する。

天正7年5月安土城天主へ移徙し、安土宗論を裁定する。11月誠仁親王に二条屋敷を進上する。天正8年3月、本願寺と勅命講和する。8月本願寺が大坂を退城した後、佐久間信盛父子を追放する。天正9年1月、安土で爆竹・馬揃を催す。2月と3月に京都馬揃、京都で左大臣推任勅使を迎える。その後、安土で讓位の勅使を迎える。8月安土で馬揃する。高野聖を処刑する。

天正10年1月、安土で爆竹・馬揃を催す。3月甲斐・信濃へ出陣。上諏訪で武田氏旧領の知行割を行う。4月甲府へ到着し、富士山を見物して安土へ帰城する。4月23日、勅使を安土城に迎える。5月4日三職推任の勅使を安土城に迎える。5月29日上洛する。6月2日未明、本能寺で明智光秀の襲撃を受け自害する。49歳。

【居所と行動】

1 戦国大名段階(上洛以前)

天文3年(1534)5月～同23年3月(勝幡・那古野時代)

【概要】

天文3年、おそらく5月に尾張国勝幡城に生まれる。天文7年9月頃、那古野城へ移った。天文15年に元服し、三郎信長と名乗った。天文16年に初陣し、天文18年2月に斎藤道三の息女と婚姻する。発給文書の初見は、天文18年11月に熱田八ヶ村中宛の制札である。

天文21年3月に父信秀が死去し、家督を継承する。8月に清須織田家と萱津で戦う。天文22年4月に聖徳寺で斎藤道三と会見する。7月、守護・斯波義統を殺害した清須織田家を攻める。天文23年1月、村木砦の今川勢を急襲する。

【詳細】

信長の出生日は、天文3年5月のものに11日(朝尾直弘『將軍権力の創出』)、12日(松田毅一・川崎桃太郎『日本史』)、13日(『イエズス会』)、27日(「羽前天童織田家譜」)、28日(「土岐斎藤軍記」ほか)がある。この他に1月2日(「和州諸將軍伝」)、1月(「名古屋合戦記」)、2月2日(「清須翁物語」)、春(「総見記」)もあるが、天文3年5月生まれの可能性が高い。出生地是那古野

明智光秀の居所と行動

早島大祐

【略歴】

生年については近年二つの説が出されている。一つは享禄元年(1528)説。これは『明智軍記』・『綿考』などが享年55とすることによる。もう一つは永正13年(1516)説。これは『当代』が享年67とすることによる。両説は丁度、一回りの違いなので子歳生まれである点では一致するが、いずれも同時代史料にもとづくものではなく、生年についての判断は保留せざるを得ない。

出自については、通説通り、美濃国周辺の出生と見られる。『兼見』元亀3年(1572)12月11日条に親類が美濃にいるとの記事があり、また、天正2年(1574)2月4日に多聞山城留守番のさいに、同所で石清水八幡宮領美濃国生津庄を巡る相論を裁許しているから(『石清水』)、具体的内容は不明ながら、同国を管領する立場にあったことがわかる。

初期の動静を探る上で参照すべき史料は、これまであまり活用されてこなかった次の記事である。すなわち信長暗殺後に書かれた『多聞院』天正10年6月17日条に、「細川ノ兵部太夫カ中間ニテアリシヲ引立之、中国ノ名誉ニ信長厚恩ニテ被召遣之、忘大恩致曲事天命如此」とあり、光秀が細川(長岡)藤孝の中間であったことが当時の人々に知られていたのである。

近年、「永禄六年諸役人附」として知られていた「光源院殿御代当参衆并足軽以下覚書」の後半部分が永禄10年(1567)頃の作成であることが明らかにされたが(黒嶋敏「『光源院殿御代当参衆并足軽以下覚書』を読む」)、その後半部分に足軽衆として「明智」の名が記されている。この史料では細川藤孝は御供衆としてあげられているから、家格上、両者には大きなひらきがあり、光秀は藤孝の下で働くことも多かったのだろう。このような実態が上記の藤孝中間という評言を呼んだのかもしれない。

※ 村井祐樹「幻の信長上洛作戦」により、「米田文書」に残された『針葉方』奥書に、「右一部、明智十兵衛尉高嶋田中籠城之時口伝也」との記述があることが確認された。同書は光秀の口伝を筆録した沼田勘解由左衛門から、永禄9年10月20日に米田貞能が近

細川藤孝の居所と行動

早島大祐

【略歴】

細川藤孝の居所と行動を執筆するにあたり、その文芸活動については土田将雄『続細川幽齋の研究』（以下『続幽齋』と略記）に多くを依拠している。また略歴執筆にあたっては『国史大辞典』項目および稲葉継陽・徳岡涼編「細川幽齋年譜」（以下「年譜」と略記）も参照した。

天文3年(1534)に將軍直臣三淵晴員の次男として生まれ(実母は清原宣賢女。なお実祖父宣賢は吉田家所縁の人物)、和泉守護細川元常の養子になった、というのが通説だったが、最近、和泉守護家との関わりについて山田康弘氏により疑義が提出されている(「細川幽齋の養父について」)。そこでは、通説の起点となった『綿考』編者小野武次郎が否定した「細川伊豆」、「細川刑部少輔」を細川伊豆守高久と細川刑部少輔晴広親子に比定、その上で両者がそれぞれ幽齋の養祖父と養父であると指摘している。なお細川伊豆守流は、管領細川家と同族関係がまったくなく、佐々木大原氏の一族政誠が義政に寵愛され、細川淡路家の養子になるかたちで細川姓を授与された一族である(設楽薫「足利義晴期における内談衆の人的構成に関する考察」)。

山田氏が課題とした熊本藩主細川家文書に和泉守護細川家関係文書が残されている点については高浜州賀子氏の指摘が参考になる(「細川幽齋・三齋・忠利をめぐる禅宗文化」)。すなわち、延宝元年(1673)に細川丹後守行孝が永源庵に立ち寄ったさいに、同庵が所持していた和泉守護細川家関係の文書が譲られたことが同庵所蔵文書により明らかになる。以上の点も踏まえると、細川藤孝の出自は、三淵晴員の息として生まれ、細川伊豆家に養子として養育されたというのが、現在、提起されている藤孝の出自理解である。

天文10年に足利義晴に出仕、天文16年に近江に逃れた義晴は19年に死去し、息義藤(義輝)に仕えた。藤の一字は義藤の偏諱である。義輝とともに、天文21年に帰京を果たすが、その義輝も永禄8年(1565)5月19日に暗殺された。義輝の弟で松永久秀に軟禁されていた一乗院覚慶(後の義昭)を脱出させ、以後、永禄11年に帰京するまで近江・越前・美濃を流転する。

執筆者紹介(掲載順, 第2版第1刷刊行時)

藤井讓治 (ふじい・じょうじ)

1947年生. 京都大学大学院文学研究科国史学専攻単位修得退学. 京都大学名誉教授.
『徳川将軍家領知宛行制の研究』(思文閣出版, 2008年) 『天皇の歴史5 天皇と天下人』(講談社, 2011年). 『戦国乱世から太平の世へ』(岩波新書, 2015年)

堀 新 (ほり・しん)

1961年生. 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程史学(日本史)専攻単位取得退学. 共立女子大学文芸学部教授.
『日本中世の歴史7 天下統一から鎖国へ』(吉川弘文館, 2010年) 『織豊期王権論』(校倉書房, 2011年).

藤井讓治 → 別掲

藤田恒春 (ふじた・つねはる)

1952年生. 関西大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了.
『小堀遠江守正一発給文書の研究』(東京堂出版, 2012年) 『豊臣秀次の研究』(文献出版, 2003年).

相田文三 (あいだ・ぶんぞう)

1978年生. 東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程修了. 株式会社虎屋勤務.

早島大祐 (はやしま・だいすけ)

1971年生. 京都大学大学院文学研究科博士後期課程指導認定退学. 京都女子大学文学部准教授.
『首都の経済と室町幕府』(吉川弘文館, 2006年) 『室町幕府論』(講談社, 2010年).

尾下成敏 (おした・しげとし)

1972年生. 京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学. 京都橘大学文学部准教授.
「天正十年初頭の羽柴秀吉の東国政策をめぐって」(『史林』92巻5号, 2009年) 「九州停戦命令をめぐる政治過程」(『史林』93巻1号, 2010年).

中野 等 (なかの・ひとし)

1958年生. 九州大学大学院博士課程中退. 九州大学大学院比較社会文化研究院教授.
『豊臣政権の対外侵略と太閤検地』(校倉書房, 1996年) 『文禄・慶長の役』(戦争の日本史16, 吉川弘文館, 2008年).

穴井綾香 (あない・あやか)

1977年生. 九州大学大学院比較社会文化学府博士課程単位修得退学. 博士(比較社会文化). 久留米市市民文化部文化財保護課主任主事.
「慶長十四年丹波篠山城普請の意義」(『日本歴史』672号, 2004年) 「慶長十四年大船没収令の伝達過程——触を中心に——」(『古文書研究』68号, 2010年).

福田千鶴（ふくだ・ちづる）

1961年生。九州大学大学院文学研究科博士課程中途退学。博士（九州大学、文学）。九州大学基幹教育院教授。

『幕藩制的秩序と御家騒動』（校倉書房，1999年）『淀殿——われ太閤の妻となりて——』（ミネルヴァ書房，2007年）『豊臣秀頼』（吉川弘文館，2014年）。

松澤克行（まつざわ・よしゆき）

東京大学史料編纂所准教授。

『天皇の歴史10 天皇と芸能』（共著、講談社，2011年）「近世の公家社会」（『岩波講座日本歴史第12巻 近世3』岩波書店，2014年）。

杉田善雄（そまだ・よしお）

1949年生。京都大学大学院博士後期課程修了。京都大学博士（文学）。大手前大学教授。

『幕藩権力と寺院・門跡』（思文閣出版，2003年）『日本近世の歴史2 将軍権力の確立』（吉川弘文館，2012年）。

しよくほうきしゆようじんぶついでところしゅうせい
織豊期主要人物居所集成〔第2版〕

2011(平成23)年6月30日初版発行
2017(平成29)年3月13日第2版第2刷

編者
藤井讓治

発行者
田中 大

発行所
株式会社 思文閣出版
〒605-0089 京都市東山区元町355 電話 075(533)6860(代)

装 幀 上野かおる
印 刷 亜細亜印刷株式会社
製 本
